

[教育実践研究報告]

高齢者ケア施設における看護学実習を通じて学生が表現した 高齢者看護の見方・考え方 - ケースレポートより -

小 野 幸 子 原 敦 子 林 幸 子 坂 田 直 美
田 中 克 子 兼 松 恵 子 奥 村 美奈子 小 田 和 美
梅 津 美 香 古 川 直 美 北 村 直 子

Gerontological Nursing that Nursing Students Have Gained through Practice at Gerontological Care Facilities

Sachiko Ono, Atsuko Hara, Sachiko Hayashi, Naomi Sakata,
Katsuko Tanaka, Keiko Kanematsu, Minako Okumura, Kazumi Oda,
Mika Umezu, Naomi Hurukawa, and Naoko Kitamura

はじめに

平成12年に開学した本学では、成熟期看護学実習を領域別実習として3年次に位置づけ、事業所、一般病院、及び高齢者ケア施設で実施している。この成熟期の領域別実習は、開学して初めての体験であり、生活援助技術や看護過程など、いわゆる基礎実習的な体験のない学生を対象としたものである。そのため教員は、施設の指導者との綿密な打ち合わせをするとともに、可能な限り出向して施設の指導者と連携して指導体制に臨んだ。そこでこのような背景の学生の高齢者ケア施設における学生の学びの内容を検討することは、今後の高齢者ケア施設における実習及び指導のあり方を検討する上で意義ある資料になると考える。

そこで本研究の目的は、高齢者ケア施設における看護学実習を通じて学生が表現した高齢者看護の見方・考え方を検討し、その学びの構造化を試みることである。

・成熟期看護学領域別実習について

1. 実習の目的・目標

成熟期看護学領域別実習の目的・目標は表1に示したとおりである。

2. 高齢者ケア施設における実習の展開

高齢者ケア施設での実習は、3年次の4月中旬から11

月中旬までの期間に介護療養型医療施設（以下療養型と省略）か、介護老人保健施設（以下老健と省略）かのいずれかで1グループ4～5名の学生が10日間行う。なお、同時期に3グループが療養型1施設、老健2施設の3施設で実習を行っている。

実習の内容・方法は、主に1名の高齢者を受持ち、施設の指導者や教員の指導のもとで看護過程を踏むというものである。また実習期間中に学内で1日、必要に応じて臨地において随時、看護学視点での対象理解の状況、立案した看護計画とその実施・評価の状況、疑問や困難状況などに関して、臨地の指導者と教員の参加のもと、カンファレンスを実施する。実習終了後、実習の目的・目標に基づく自己評価を基盤とした実習評価を指導教員との面接で実施する。また、個々の学生の体験の拡大をはかることを目標に、各学生が受持ち高齢者の看護の体験に関して、抄録を作成し、同期間が高齢者ケア施設で実習した学生全員に配布して発表し、全体討議する。そして、その後、学生はケースレポートを作成し提出する。

・研究方法

1. 対象および倫理的配慮

高齢者ケア施設における看護学実習として、平成14年度に療養型、もしくは老健で実習した3年次生、77名の

表1 成熟期看護学(領域別)実習の目的・目標

<目的> さまざまな健康状態で生活を営んでいる成熟期の人々への看護実践を通じて、成熟期看護のあり方について理解を深める。	
<目 標>	
1. 健康課題の異なる成熟期にある人々とその家族の健康生活を理解し、看護過程を活用して、看護実践するための必要な基本的知識・技術・態度を養う。	
2. 成熟期の人々の健康生活を支援する保健医療福祉体制の実際と、その中で看護の役割・機能について理解を深める。	
3. 成熟期の人々とその家族への看護体験を通じて、成熟期看護の現状の課題と自己の課題を明らかにできる。	
4. 1～3を通じて、成熟期看護に対する自己の見方・考え方を考察できる。	
<具体的目標>	
1. 成熟期にある人とその家族の健康生活を理解し、看護の役割と特性を学ぶ。	
1) 患者・家族とのコミュニケーションや患者・家族に関する記録物及び保健医療福祉チームメンバーから情報収集し、成熟期にある人とその家族を理解し、看護ケアが必要な状態を診断できる。	
<対象理解の視点>	
(1) 成熟期にある人個々の発達段階とその特性を踏まえた現在の生活状況、発達課題達成状況、並びにその人らしさ	
(2) 加齢と健康状態（健康障害の種類と程度）に伴う身体的・精神心理的・社会経済的変化と発達課題の達成状況	
(3) 過去から現在、現在から近い将来への生活の場と生活状況の変化及び発達課題達成状況の変化	
(4) 健康生活の保持・増進もしくは健康障害からの回復のために受けている保健医療福祉サービス	
(5) その人と家族が捉えている現在と今後の見通し	
2) 成長発達の促進、発達課題達成の促進と回復、老化の予防、QOL及びその人らしさの尊重の視点から看護を計画・実施・評価できる。	
<援助の視点>	
(1) その人と家族の意向・意思を尊重した援助	
(2) その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助	
(3) その人と家族の安全性と安楽性を確保した援助	
(4) 保健・医療・福祉との有機的な連携	
2. 健康課題の異なる成熟期にある人とその家族を理解し、看護の役割と特性を学ぶ。	
A. 成熟期の人とその家族が健康維持増進のための生活を確立する看護	
B. 健康回復過程にある成熟期の人とその家族の看護	
C. 生活の再編が必要な健康障害を持つ成熟期の人とその家族の看護	
D. 生活の再構築が必要な健康障害を持つ成熟期の人とその家族の看護	
E. 人生の終末を迎える（迎えている）成熟期の人とその家族の看護	
*A B C D Eの具体的目標は省略	

うち、研究の趣旨を書面と口頭で説明するとともに、研究協力の有無が実習成績や今後の学習上、影響のないこと、また個人名が特定されないよう配慮することなどを説明し、書面で承諾の得られた73名のケースレポートである。

3. 分析方法

分析対象は、ケースレポート中の 受持ち高齢者の特性、 受持ち高齢者の看護体験を通じて高齢者看護の見

方・考え方の記述内容である。分析手順として、 学生の受持ち事例の特性として、施設別に年齢、性別、主な健康障害の種類、介護度、痴呆度を整理した。 受持ち事例の中で壮年期の事例を除き、高齢者看護の見方・考え方に関しては、質的記述的に分析した。具体的には記述内容から「高齢者看護とは」の視点でを抽出し、類似性に基づいて分類整理した。 について、その関連性をみるために、記述内容に戻りつつ分類されたものを原因・結果の視点で検討した。なお、これらの分析過程は、成熟期看護学教育研究者で合意が得られるまで検討した。

結果

1. 高齢者ケア施設別にみた学生の受持ち事例の特性

療養型及び老健で実習した学生は、各々26名、47名であり、施設別に見た学生の受持ち事例の特性は表2に示すとおりであった。

発達段階では、いずれの施設においても、後期高齢者が多い傾向を、性別では、同様に女性が多い傾向を示した。なお、高齢者ケア施設での実習ではあったが、2名の学生は壮年期の対象を受け持っていた。主な健康障害は、療養型では脳血管障害が多い傾向を示し、老健では、これに加えて骨折・骨疾患が多い傾向を示した。介護度は、療養型では介護度5が、老健では介護度2と5が多い傾向を示した。

なお、痴呆度については、施設により判定資料が異なり、学生が受け持った高齢者の痴呆度は、それぞればらつきがみられた。

表2 実習施設別学生の受持ち事例特性の概要

受持ち事例の特性		療 養 型 医療施設 N = 26	老人保健 施 設 N = 47
発達段階	壮年期	2	0
	前期高齢者	3	2
	後期高齢者	21	45
性別	男性	9	2
	女性	17	45
主な健康障害 (複数回答)	脳血管障害	16	20
	心疾患	2	9
	癌	3	2
	骨折・骨疾患	4	20
	痴呆	4	16
	その他	8	12
介護度	1	1	2
	2	1	17
	3	6	7
	4	4	16
	5	12	5

2. 高齢者ケア施設別にみた学生が表現した高齢者看護の見方・考え方の記述数

高齢者ケア施設別にみた学生が表現した高齢者看護の見方・考え方の記述数は、壮年期の受持事例を除いて、療養型で実習した学生全体の記述数は116、老健が183、総計299記述数であり、学生一人当たりの記述数は5～7であった。

3. 学生が表現した高齢者看護の見方・考え方

学生が表現した高齢者看護の見方・考え方は、【高齢に伴う身体諸機能の低下に加えて、健康障害を持つことによる日常生活動作・行動の低下に対する援助の必要性・重要性】【援助を受けることなしに日常生活を送れない自分に否定的感情を持つ高齢者の援助の必要性・重要性】【意向・意志を尊重した援助の必要性・重要性】【自立性・自律性を尊重した援助の必要性・重要性】【安全性と安楽性を確保した援助の必要性・重要性】【職員間や家族との連携の必要性・重要性】【後期高齢者に対する人生統合への援助の重要性】【高齢者との信頼関係の形成の重要性】【コミュニケーション能力の必要性】【高齢者個々の生き方・価値観などを尊重した対応の必要性・重要性】【高齢者の言動の意味を推測・解釈しつつケアを提供し、その結果に対する高齢者の反応でその適否を判断することの重要性】の11に分類された。以下に、これらに分類された学生の記述内容を例示する。

1) 【高齢に伴う身体諸機能の低下に加えて、健康障害を持つことによる日常生活動作・行動の低下に対する援助の必要性・重要性】

脳血管障害で右片麻痺の後期高齢者を受持った学生は、「高齢者は加齢に伴って、様々な身体の機能が低下しているだけでなく、脳梗塞による右片麻痺のために自立して歩行することができず、車椅子を活用した移動動作が必要で、排泄・食事・更衣・清潔動作などに援助が必要な人々であり、障害に基づいて看護職や介護職が適切に援助することが大切である」。

また、高血圧と慢性心不全の安定期の後期高齢者を受持った学生は、「便秘の予防が受持ち高齢者の優先するケアが必要な状態であった・・・高齢者は、加齢に加えて個々の疾患や病状がどのようにその高齢者の生活に影響を与えているかを把握して、それに応じた援助を工夫することが必要」と記述した。

2) 【援助を受けることなしに日常生活を送れない自分に否定的感情を持つ高齢者の援助の必要性・重要性】

脳血管障害の後期高齢者を受持った学生は、「日常生活を送る上で何らかの援助を必要としているが、そのこ

とに申し訳なさや情けなさを感じているため、そのような気持ちを理解しつつ援助することが必要である」

同様の障害の後期高齢者を受持った学生は、「排泄や入浴などの日常生活動作行動が自立していない高齢者が多いが、そのような自分を受け入れられないために、自発的に訴えない、遠慮していることが少なくないので、遠慮しなくてすむような援助が求められる」

さらに、同様の状態にある前期高齢者を受け持った学生は、「オムツ交換の際に、『こんなことまでお世話をかけてはもうだめだね』と訴えていた。援助を受けなければ生活できない自分を受け入れることができないために援助を受けることが苦痛であるのだろう。看護・介護者は、ケアする際に、そのような高齢者の感情を理解して援助を行うことが必要である」と記述した。

3) 【意向・意志を尊重した援助の必要性・重要性】

脳血管障害に軽度の痴呆を伴う後期高齢者を受持った学生は、「私が一生懸命考えたことでも、決してその人にとっては適切でないこともあることを経験した。

・・・たとえば軽度の痴呆があってもこんな風にしてほしいとか、それは嫌とかという気持ちを持っているので、適切だと思う方法を示して確認することが大切であり、高齢者がしてほしいこと、してほしい方法を聞いて、それらを含めて計画・実施することが重要である」

また、痴呆患者を受け持った学生は、毎日面会に訪れる家族との対応場面を通じて、「娘さんは患者さんにとって身近な存在であり、これまでの患者さんの状態をよく理解している人であった。・・・娘さんが母親にしてほしい方法を受け入れて行うことが結果として患者さんのためにもなることなので、家族の意向を重視することも大切である」

さらに、脳血管障害で軽度の痴呆症状をもつ患者を受持った学生は、「痴呆があっても人生の大先輩であり、意志も持っているため、それを尊重した対応が必要であり、それができて初めてその人らしい生活の援助が可能になる」と記述した。

4) 【自立性・自律性を尊重した援助の必要性・重要性】

脳梗塞で左片麻痺のある後期高齢者を受持った学生は、「麻痺があっても自分でできることはできる場や機会を作り、高齢者の自立を阻害しないようにすることが大切である」

また、肺癌で腰椎転移している後期高齢者を受持った学生は、「便意や尿意のある高齢者もいれば、ない人もいます。それによってケアを変えることが必要」

さらに、心不全の後期高齢者を受持った学生は、「受持ち高齢者は、病気を悪化させないために間食を我慢したり、3食の食事を残すなどして我慢していることが多かった。高齢者なりに自分の体の状態を理解して悪くならないようにがんばっていることを、看護者は尊重し、支援することが大切」と記述した。

5) 【安全性と安楽性を確保した援助の必要性・重要性】

脳出血で左片麻痺の後期高齢者を受持った学生は、「個々によってその程度は異なるが、高齢者、特に後期高齢者は、感覚機能や運動機能に障害がある人が多いので、危険を察知することが難しく、転倒などの事故につ

ならないよう安全な環境を提供する必要がある」

また、慢性関節性リウマチで歩行障害のある後期高齢者を受持った学生は、「高齢者の援助に際して、転倒やベッドなどからの転落などをしないよう安全を確保することが求められるが、それだけでなく、同時にその高齢者にとって、心地よいと感じられるようケアを工夫することが大切である」と記述した。

6) 【職員間や家族との連携の必要性・重要性】

脳梗塞に痴呆を合併した後期高齢者を受持った学生は、「看護職は高齢者個々の疾患や病状を理解するとともに全体的に捉え、それを介護職や家族に伝えて理解してもらい、お互いに連携をとることが大切」

また、アルツハイマー型痴呆の前期高齢者を受持った学生は、「日常生活の援助は、介護者に任せっきりにするのではなく、本当にその人に合っているかどうかを介護職員と一緒にケアしてその人にあった援助になるよう連携をとることが必要である」

また、脳梗塞、慢性呼吸障害で痴呆を伴う後期高齢者で新たに入所してきた高齢者を受持った学生は、「家族も都合があることもあろうが、施設に入所している認知障害がある高齢者の場合は、家族から自宅での状態を聞くとともに、援助方法を一緒に考えたり、ケアしていくことも大切」

さらに、脳梗塞と心筋梗塞でリハビリをしている前期高齢者を受持った学生は、「本人や家族の設定している目標を達成できるよう施設内職員と家族が一体になって援助していくことが大切」と記述した。

7) 【後期高齢者に対する人生統合への援助の重要性】

高血圧と硬膜外出血の術後の後期高齢者を受持った学生は、「後期高齢者では特に人生の終末をその人らしく充実できるような援助を追究していくことが大切」

また、脳梗塞と鬱の状態にあった後期高齢者を受持った学生は、「これまで歩んできた人生を悔やんでばかりいた高齢者、現状に不満ばかり述べる高齢者がいたが、長い人生を生きてきて、いろいろ後悔することや現在の状況にいろいろ不満もあろうが、自分なりに納得できるような援助が大切」

さらに、高血圧・肥満・脳梗塞・腎機能低下のある後期高齢者を受持った学生は、「高齢者は人生の終盤にある人々であり、これまで生きてきた人生はそれぞれ異なる。これまでの人生をどのように評価できるか、現在の状態を受け入れ、今後の人生をどのように生きていこうとしているのかをケアをしながら会話を持って、それに理解を示しながら、その人なりに人生を締めくくれるようすることが大切」と記述した。

8) 【高齢者との信頼関係の形成の重要性】

大腿骨頸部骨折で手術経験のある前期高齢者を受持った学生は、「看護職（私たち自身）や行おうとする必要なケアを受け入れてもらうには、まず信頼関係を作ることが重要」

また、脳梗塞があるものの杖歩行でほぼ自立している後期高齢者を受持った学生は、「信頼関係ができると、訪れるのを楽しみにしてくれたり、笑顔が見られるようになったり、自発的に話してくれるようになる」と記述した。

9) 【コミュニケーション能力の必要性】

脳梗塞で片麻痺と言語障害のある後期高齢者を受持った学生は、「信頼関係を作るためには、言語的コミュニケーション能力とともに、非言語的コミュニケーション技術が必要」

また、大腿骨頸部骨折、脳梗塞で難聴のある後期高齢者を受持った学生は、「難聴のある援助において、その人にあったコミュニケーション方法で見出して、意志の疎通がとれることが必要」と記述した。

10) 【高齢者個々の生き方・価値観などを尊重した対応の必要性・重要性】

糖尿病と脳梗塞のある後期高齢者を受持った学生は、「後期高齢者は、長年の人生を通じて、その人なりの価値観や考え方をもっている。私たちの価値観を押しつけるのではなく、その人の価値観に沿うことが大切」

また、脳梗塞で息子の転勤で東京から岐阜にきた後期高齢者を受持った学生は、「その人が生きてきた人的・社会経済的環境は個々別々であるため、個々の高齢者によって、価値観や生き方を尊重することが大切」

また、狭心症と脳梗塞で若くしてご主人と死に別れ、一人で子育てしてきた後期高齢者を受け持った学生は、「長い人生経験の中で築いてきた個々の高齢者のあり方を尊重することが大切」と記述した。

11) 【高齢者の言動の意味を推測・解釈しつつケアを提供し、その結果に対する高齢者の反応でその適否を判断することの重要性】

中等度の痴呆を受持った学生は、「私たちには理解できない言動でも、それは高齢者にとって意味や理由があるものであるため、分からないとあきらめず、これまでの生活背景や大切にしてきたものなどを家族や施設の職員から収集するとともに、一緒に行動したり、観察を通じて、思ったり、考えたりしたことを確認したり、ケアの結果の反応を捉えて適切であったかどうかを判断できることが大切」

同様に中等度の痴呆を受持った学生は、「痴呆の人の言っていることは、つじつまが合わなかったり、どうしてそのような行動をとるのか、受持った当初は理解困難なことが多いが、その高齢者の頭になって考えてみたり思ってみたりして、それを確認しながら関わるのが重要である」と記述した。

4. 学生が表現した高齢者看護の見方・考え方の関連性

学生が表現した高齢者看護の見方・考え方について分類された11について、再度、記述内容に戻って、その関連を検討した結果、図1に示すような構造を描くことができた。すなわち、【高齢者との信頼関係の重要性】が基盤に 【高齢者の言動の意味を推測・解釈しつつケアを提供し、その結果に対する高齢者の反応でその適否を判断することの重要性】と、 【高齢に伴う身体機能の低下に加えて健康障害を持つことによる日常生活動作・

行動の低下に対する援助の必要性・重要性】、そこから生ずる【援助を受けることなしに日常生活を送れない自分に否定的感情を持つ高齢者の援助の必要性・重要性】と、および【自立性・自律性を尊重した援助の必要性・重要性】【安全性・安楽性を確保した援助の必要性・重要性】【意向・意志を尊重した援助の必要性・重要性】【職員間や家族との連携の必要性・重要性】とが各々関連すると共に、これらは【高齢者個々の生き方・価値観などを尊重した対応の必要性・重要性】を達成するために必要であり、これを通して【後期高齢者に対する人生統合への援助の重要性】に結びつくというものである。そしてこれらにはいずれもコミュニケーション能力が関与するというものである。

考察

1. 実習目標達成度の観点から

学生が表現した高齢者看護の見方・考え方及び導かれた関連から実習の目標殊に具体的目標の1の援助の視点から評価すると、保健・医療・福祉と有機的連携という観点では不足はあるものの、ほぼ達成していると捉えられよう。さらに、具体的目標である2) Eの人生の終末を迎えている高齢者の看護援助も一部の学生ではあるが、捉えられている。これらは、実習施設の指導者との綿密な打ち合わせによる学生の実習目的・目標を理解した施設側の教育的環境（例えば、たとえ一見稚拙に受け取られるようなことであっても、学生の自由な発想・

思考を受け入れ了解して、人的調整をする、高齢者にとって事故につながるような危険性がなければ、見守っていくといったような指導者の配慮）、看護が展開されていくプロセスにおける指導は、成熟期看護方法9の演習及び領域別実習前に行っている理論と統合における紙上患者を活用した看護過程演習を基盤に、教員が実習施設に出向して、学生の受持高齢者の理解をもとに、個々の学生の思考の過程や段階に基づいて指導を実施するなど影響していると捉えられよう。また、教員が存在することによって、実習学生全員に共通な課題を素早くキャッチでき、随時カンファレンスできたことも影響していよう。しかし、領域別実習の初年度であったことから、このような指導体制が組めたといえる。現に、2年目に入った今年度は、この学年のように教員は緻密に実習施設に出向できない現状がある。このことに影響もふまえて、今後の指導のあり方の検討が必要であろう。

2. 学生が表現した高齢者看護の見方・考え方から見いだされた関連（図）について

学生が表現した高齢者看護の見方・考え方の関連は、分析し、分類してきた段階で再度、記述内容に戻って精読することを通して得られたものである。これらは高齢者看護の理論につながる意義ある発見と捉えられないだろうか。未だ高齢者看護の理論化は発展途上であり、筆者が検討した「高齢者の自我発達を促進する援助の構造」¹⁾も検証には至っていない。検証のための個人の研究的努力もさることながら、次年度の学生のレポート分析

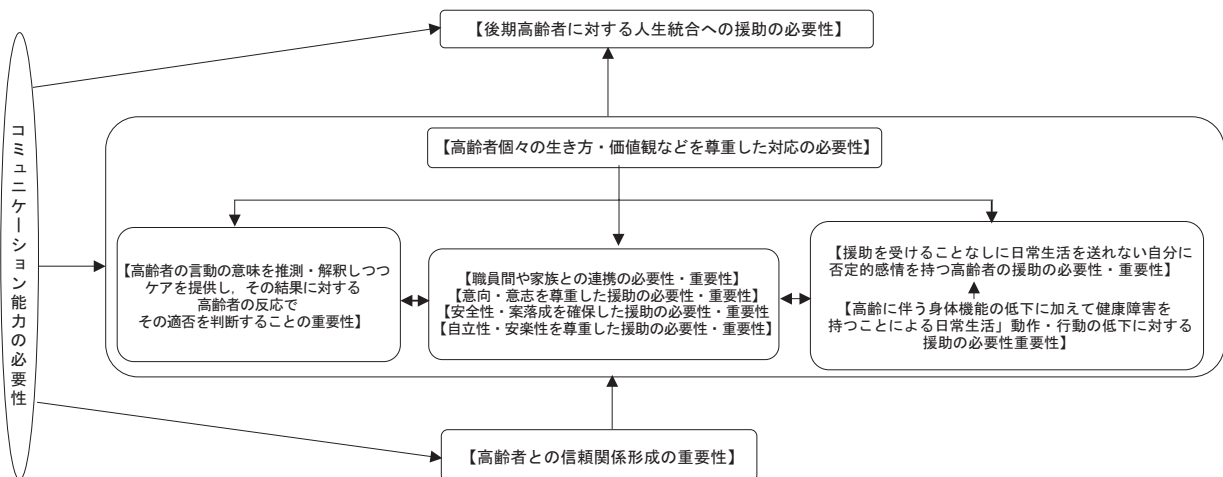


図1 学生が表現した高齢者看護の見方・考え方の関連

を積み重ねを通じて、さらに分析を積み重ねることによっても、これらの検証、理論化を進めていくことができるのではないかと考える。

なお、本研究の限界は、実習施設別や実習時期別による詳細な分析をしていないことから、その達成状況の相違の有無を明らかにできないことである。

まとめ

看護の立場で高齢者とのコミュニケーション経験がなく、かつ看護過程も紙上患者での体験のみの学生の、高齢者ケア施設での看護学実習の教育上の課題を見出すために、実習の目的・目標の達成状況をケースレポートで表現された高齢者の見方・考え方から分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 個々の学生の高齢者看護の見方・考え方は、5～7記述であったが、総計299記述数みられ、11に分類された。
2. 分類された11の内容は、実習目標をほぼ達成されたといえるものであった。しかし、これは実習施設の指導者と教員の指導との連携体制によるところが大きいと捉えられた。
3. 学生が表現した高齢者見方・考え方の11分類は、関連(図)として示すことができ、高齢者看護の理論化に貢献できるものと捉えることができた。

謝辞

本研究に際して、貴重な資料を提供下さった学生にお礼申し上げます。また、ご多忙の中、学生がのびのびと実習する環境を提供して下さると共に、実習指導に直接的・間接的に関わって下さいました施設の指導者及び職員の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 小野幸子：高齢者看護の方法に関する研究 - 自我発達を促進する看護援助の構造 - , 千葉看護学会会誌, 3(1) ; 32-38, 1997.

(受稿日 平成15年2月10日)